

# グローバル教員に求められる資質に関する研究

## －海外での授業実践による自己変容を中心に－

研究代表者	朝倉 淳	(初等カリキュラム開発講座)
研究分担者	小原 友行	(社会認識教育学講座)
	深澤 清治	(英語文化教育学講座)
	松浦 武人	(初等カリキュラム開発講座)
	松宮奈賀子	(初等カリキュラム開発講座)

## I 研究の背景と目的

### 1. 研究の背景

政治・経済のみならずあらゆる分野で一層のグローバル化が進んでいる。このような中、学校教育においてもグローバル人材の育成が求められている。では、グローバル人材とはどのような資質を有する人材であろうか。また、そのような人材育成に直接かかわる学校教員自身には、どのような資質が必要なのであろうか。

本研究グループは、少しずつ構成員を変えながら 20 年以上にわたって、グローバル教育を推進することができる人材育成に取り組んできた。現在は、広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センター(略称 GPSC)として、米国の連携校(小学校・中学校・高等学校・大学)と協力して、教員の相互訪問や交流授業の実施、フォーラム等の開催などをプロジェクトとして実施している。

本研究では、本研究グループのこれまでの研究成果や課題を踏まえ、現在及び未来の社会において求められるグローバル人材の育成について考察するものである。なお、本稿ではグローバル人材の育成にあたることのできる教員を指して「グローバル教員」と呼ぶこととする。

### 2. 研究の目的と方法

本研究では、国際フォーラムや大学院生による海外での授業実践、及びそれらの成果や課題の検討を通して、グローバル教員として必要な資質を示すことを目的とする。

研究の方法は次のとおりである。

- ① 答申等に示されたグローバル人材・グローバル教員の資質の検討
- ② 「第 10 回学校間交流国際フォーラム」(2014 年 7 月 5 日)における討議の検討
- ③ 「体験型海外教育実地研究」における自己変容の検討
- ④ グローバル教員に求められる資質の考察

(朝倉 淳\*・小原友行・深澤清治・松浦武人・松宮奈賀子)

## II 答申等に見るグローバル人材の資質

### 1. 新しい時代に必要となる資質

2014 年 11 月 20 日に文部科学大臣から中央教育審議会に「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」という標題で諮問が行われている。そこでは、新しい時代

に必要となる資質・能力の育成に関連して、次のような記述がみられる。

新しい時代に必要となる資質・能力の育成に関連して、これまでも、例えば、OECD が提唱するキー・コンピテンシーの育成に関する取組や、論理的思考力や表現力、探究心等を備えた人間育成を目指す国際バカロレアのカリキュラム、ユネスコが提唱する持続可能な開発のための教育 (ESD) などの取組が実施されています。さらに、未曾有（みぞう）の大災害となった東日本大震災における困難を克服する中で、様々な現実的課題と関わりながら、被災地の復興と安全で安心な地域づくりを図るとともに、日本の未来を考えていこうとする新しい教育の取組も芽生えています。

これらの取組に共通しているのは、ある事柄に関する知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行い、子供たちがそうした教育のプロセスを通じて、基礎的な知識・技能を習得するとともに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにすることが重要であるという視点です。

※下線は引用者による。

このうちキー・コンピテンシーは「①社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力(個人と社会との相互関係)、②多様な社会グループにおける人間関係形成能力(自己と他者との相互関係)、③自律的に行動する能力(個人の自律性と主体性)」(文部科学省 Web ページ 1)より)と説明されている。

国際バカロレアについては「国際バカロレア (IB) は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。」と示されている。また、学習者像として「探求する人 知識のある人 考える人 コミュニケーションができる人 信念をもつ人 心を開く人 思いやりのある人 挑戦する人 バランスのとれた人 振り返りができる人」(文部科学省 Web ページ 2)より)が示されている。

ESD については、国立教育政策研究所の報告書に、「ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度の例」として「①批判的に考える力 ②未来像を予測して計画を立てる力 ③多面的、総合的に考える力 ④コミュニケーションを行う力 ⑤他者と協力する態度 ⑥つながりを尊重する態度 ⑦進んで参加する態度 など」<sup>3)</sup>が示されている。

表現は様々であるが、内容としては大きくみれば同じような資質が示されている。計画し実行する力、総合性やバランス、他者との関係性、自己開示や主体性などであり、教員にも同様に求められる資質と言えよう。

## 2. グローバル教員として求められる資質

より直接的にグローバル教員に言及したものとしては、中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会の報告「これからの学校教育を担う教員の在り方について（報告）— 小中一貫教育制度に対応した教員免許制度改革—」（2014 年）がある。そこには、「背景～教員の役割の重要性～」という見出しで示された項目の一つとして「国際化への対応」があり、次のように記されている。

世界全体の国際化が加速する中、多様な価値観と共存し、新しい価値を創造していくこ

とが、これからの日本人に求められている。すなわち、イノベーションを創出し、多様な文化や価値観を受容し共生していくことができる人材や、国際的に活躍できる人材の育成が必要となっている。

ここでは、多様な価値観との共存、新しい価値の創造が示されており、具体的には、「イノベーションを創出することができる人材」「多様な文化や価値観を受容し共生していくことができる人材」「国際的に活躍できる人材」の育成が必要であると示されている。これらは別々の人材ではなく、こういう資質を兼ね備えた人材が求められていると考えられる。

(朝倉 淳\*・小原友行・深澤清治・松浦武人・松宮奈賀子)

### Ⅲ 第 10 回学校間交流国際フォーラムにおける討議

#### 1. フォーラムの概要

本フォーラムの概要・プログラムは次のとおりである。

主催：広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センター

日時：2014年7月5日(土) 13:00-16:10

会場：広島大学大学院教育学研究科 K102 教室

テーマ：日米協働によるグローバル教員養成をめざして～6大学間コンソーシアム(西日本3大学・米国NC州3大学)の成果と展望～

内容：総合司会 松宮奈賀子(広島大学)

開会行事(13:00-13:10) 挨拶 宮谷真人(広島大学大学院教育学研究科長)

挨拶 深澤清治(広島大学 GPSC 代表)

#### 第1部 シンポジウム(13:10-14:30)

テーマ：日米協働によるグローバル教員養成をめざして～大学間ネットワークを活用した各大学の取り組みの成果と展望～

コーディネーター 朝倉淳(広島大学 GPSC)

提案者(五十音順) 小原友行(広島大学 GPSC)

武田雅史(米国NC州立ウェスタンカロライナ大学)

長谷川ユリ(大阪教育大学)

眞野美穂(鳴門教育大学)

#### 第2部 フォーラム(14:45-16:00)

テーマ：グローバルパートナーシップを備えた教員としての自己変容～グローバル教員養成プログラムに参加して～

コーディネーター 神山貴弥(同志社大学) 松浦武人(広島大学 GPSC)

話題提供者 Ms. Anissa Jill White(米国NC州 Elmhurst Elementary School)

Mr. Julian Carter(米国NC州 C. M. Eppes Middle School)

小田輝(広島大学教育学部学生)

天野航平(広島大学大学院教育学研究科大学院生)

開会行事(16:00-16:10) 挨拶 朝倉淳(広島大学 GPSC)

#### 2. 登壇者が示すグローバル教員の資質

第一部のシンポジウムでは、登壇者からグローバル教員の資質のためのキーワードとし

て次のとおり発表があった(要旨。敬称略)

○武田雅史(米国 NC 州立ウェスタンカロライナ大学 コンソーシアム派遣学生受入)

「守破離」教えを守り、殻を破り、離れて自分で創造する。創造性と実行力を持っていること。大学もその資質を身につけられる環境を与えていくべきである。

○小原友行(広島大学 GPSC)

「5C's (Communication, Collaboration, Critical, Creation, Challenge)」特に, Challenge (自分に挑戦できる) 人がこれからは大切である。

○眞野美穂(鳴門教育大学)

「自立」自分の文化の中にとどまっていたら自分の文化を意識することは少ないが、外から見てみると、それらがよく見えるようになる。そのような視点を持ったり、見詰め直したりすることができる必要がある。

○長谷川ユリ(大阪教育大学)

「チャンスをつかみ、チャンスを広げよう」チャンスはいくらでもあるが、自分でそれをつかみ、成功すれば自信につながる。失敗すれば失敗から学べる。この2つからチャンスを掴んでいくことがチャンスをつかみ、広げていくことになる。

また、第二部のフォーラムでは、登壇者からグローバル教員の資質として大切なことが次のように示された。

○小田輝(広島大学教育学部学生：ウェスタンカロライナ大学留学経験)

日本の好きな所を発信できること (他の国と比較して)

○天野航平(広島大学大学院教育学研究科大学院生：「体験型海外教育実地研究」参加)

フロンティア・スピリッツを持つこと (常識という殻を破る)

○Julian Carter(米国 NC 州 C. M. Eppes Middle School：「体験型海外教育実地研究」協力校)

生徒が今何を必要としているのか、さらに5年後、10年後には何を必要としているかなどを見据えることができること。お互いの国が影響し合っていて関係していることを理解していること。

○Annis Jill White(米国 NC 州 Elmhurst Elementary School：「体験型海外教育実地研究」協力校)

勇気・忍耐・親切心・理解を示す力・包容力などをもち、多角的に物事を見ることができること。

### 3. 学校間交流国際フォーラムにおけるグローバル教員の資質の考察

学校間交流国際フォーラムにおいて示されたグローバル教員の資質は、以下のように大きく3点に整理できよう。

一つは「挑戦すること」である。それは、教師自身が、現在の自分自身や既知の世界にとどまるのではなく、未知の世界に踏み込み可能性を拓けていくことである。たとえうまくいかなかったとしても、挑戦することからは大きな学びが得られる。挑戦することそのものが大切な資質と考えることができよう。

二つ目は「変容すること」である。上記のような挑戦のあとには、変容がある。これを柔軟に受け入れることである。変容することは、ときに困難なことでもある。しかし、異

なる文化や価値観にであって生じた変容を受け入れることは、グローバルな人材としての重要な態度であろう。また、教師のこのような態度そのものから、児童生徒は大切なことを学ぶことができるのである。

三つ目は、「自己認識や自己の在りように関すること」である。それは「自立」でもあり、挑戦し、変容した先に求められる資質でもある。教師自身が、自己や自文化に対する認識を持ち、自立をしなければ、グローバル社会の中で様々な状況に混乱したり翻弄されたりすることになるであろう。

上記の3点についても別々のことではなく、文脈のある一貫した態度としての資質であり、グローバル人材の育成にかかわる教員に求められる大切な資質であろう。

(朝倉 淳\*・小原友行・深澤清治・松浦武人・松宮奈賀子)

#### IV 「体験型海外教育実地研究」にみるグローバル教員としての資質

##### 1. 海外での授業実践による自己変容等の状況

「体験型海外教育実地研究」は、GPSCが開発し企画・実施しているプログラムである。本年度は、広島大学大学院教育学研究科博士課程前期第1学年の大学院生13名が参加した。4～8月の事前の教材研究、教材作成や学習指導案検討などを経て、9月19日～9月29日の米国での教育実地研究において、小中学校での授業実践、児童・生徒との交流、意見交換、教材調査などを行った。また、帰国後の10～11月には、教材の仕上げやレポートの作成を行い、12月11日には研究成果発表会を実施している。

このプログラムの大きな特徴は、参加者が米国において授業をすることである。参加者は、米国で授業をするために必要な英語能力を十分に有しているわけではない。しかし、むしろこのことがグローバル教員としての資質は何かを示している。参加者が事後に整理したレポートや研究発表では、グローバル教員の資質と関係して、たとえば次のような記述や発言(要旨。一部)があった<sup>4)</sup>。

- ・ 自分自身の考えを持つことやそれを表現することの重要性を感じた。
- ・ 言語だけに頼らず、あらゆる方法で伝えようとすることでコミュニケーションが生まれた。
- ・ 意思疎通を図るためにはお互いの言語を知るとはもちろん重要であるが、相手を尊重し、話を聞いたり人を理解したりしようとする態度が大切であることを実感した。
- ・ 英語を学ぶことが目的ではなく、外国の人とも積極的に関わっていきたい。
- ・ グローバルマインドは、海外でだけ必要な心構えではなく、国内でも同様に実践すべきことである。
- ・ 相手の言っていることが聞き取れなければただ素直に聞き返すことであり、まずは相手をしっかりと見て、かかわろうとすることである。それは、誰に対しても実践できることである。

##### 2. 「体験型海外教育実地研究」の有効性

「体験型海外教育実地研究」では、なぜこのようなグローバル教員としての資質に関係する変容が見られるのであろうか。

「体験型海外教育実地研究」は、言語によるコミュニケーションが十分できない中で、



異なる価値観や文化を有する者同士がかかわり合い、ともに授業をつくっていくプログラムである。その過程を通して、学習者の理解、教材化の方法、明確な授業構成、教師の自己開示などの重要なポイントをより体験的に学ぶことができる。具体的には次のような点である。

- ① 学習者に対する意識を高め、学習者の考えや気持ちを全身で理解しようとする。
- ② 身の回りを含め、あらゆる事象に対して教材としての可能性を見つけ、それを教材として具現化していくこと。
- ③ 授業の目標や学習活動、学習過程を簡潔かつ整合性あるものにする。
- ④ 学習に適切な環境を構成すること。
- ⑤ 言葉だけではなく、あらゆる方法でコミュニケーションをとること。
- ⑥ 自己開示し、ありのままの姿でかかわり、他者を受容し尊重すること。

ゼロから教材を開発し、授業を構成し、言語によるコミュニケーションが難しい中で実践することは容易ではない。しかし、この過程を経ることによって、「体験型海外教育実地研究」の参加者は、授業づくりの本質を学ぶとともにグローバル教員の資質として大切な点を学ぶことができるのである。

(朝倉 淳\*・小原友行・深澤清治・松浦武人・松宮奈賀子)

## V 研究の成果と今後の課題

本研究において考察したグローバル教員としての資質は、結果的に教員として必要な資質とほぼ重なるものであった。「グローバル教員」としての資質は、それほど特別なものではなくて、教師として、人として、本来重要な資質であると考えられることができる。その中でも、強調されることは、次のような点であろう。

- ① 人や事象とかかわり、他者や異文化を受容し、尊重する。
- ② 新たな問題や目的に挑戦し、思考し、実行する。
- ③ 自己を受容し、開示し、変容し、自立に向かう。

では、改めてこのような資質を教員養成や教員研修においてどのように育成すればよいのだろうか。また、すべての子どもたちに、現在から未来につながる重要な資質として、どのように育成すればよいだろうか。引き続き、研究を進めていきたい。

(朝倉 淳\*・小原友行・深澤清治・松浦武人・松宮奈賀子)

## 引用・参考文献

- 1) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/016/siryu/06092005/002/001.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/016/siryu/06092005/002/001.htm)  
(2015年2月12日 最終閲覧)
- 2) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/ib/1353422.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/1353422.htm) (2015年2月12日 最終閲覧)
- 3) 研究代表者 角屋重樹「学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究最終報告書」国立教育政策研究所, 2012年
- 4) 広島大学教育学研究科グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センター編『平成26年度「体験型海外教育実地研究」参加者による開発教材集』, 2015年